

電子書籍のデジタルエステイト

Catalogue Général  
*hiver* 2016

総合カタログ  
2016 年冬号

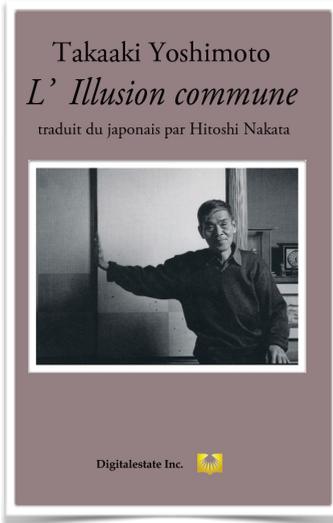
General Catalogue  
winter 2016

Digitalestate Inc.  
Japan

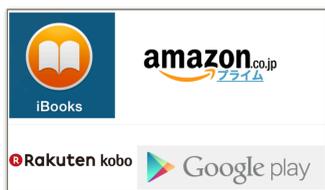


# L'illusion Commune

Takaaki Yoshimoto ( traduit par Hitoshi Nakata)



印刷本 定価 2,268円



電子書店一覧

希望小売価格 1,000円

L'illusion commune publié en 1968 deux ans après la parution de son premier chapitre «du tabou» dans la revue Bungei donna un grand coup surtout aux étudiants qui cherchaient en vain à s'armer de quelque théorie efficace lorsqu'ils se trouvaient alors justement dans l'agitation universitaire à la dimension mondiale sous l'intensification de la guerre vietnamienne, en attendant chez nous l'an 1970 le dixième anniversaire et la reconduction du traité de sécurité avec les États-Unis. Mais comme toute théorie vient toujours trop tôt ou trop tard, les réflexions de l'auteur ne semblaient pas être comprises en ce temps-là. Il écrit, cependant, des articles à commenter les questions d'actualité dans Shikô, revue fondée par lui en 1961, par lesquels il en communiqua ses jugements aux lecteurs de minorité. Yoshimoto eut un entretien avec Michel Foucault sur le thème de la méthode de la perception du monde à Tokyo l'avril 1978, après dix ans de la publication du livre. Il nous indiqua l'arrivée de pleine saison où on pourrait discuter l'illusion commune enfin au niveau académique et international. La lecture de cet entretien nous fit savoir, toutefois, que la discussion y tourne en rond jusqu'à la fin. C'est la logique des choses. Car Yoshimoto pouvait lire alors presque toutes les œuvres de Foucault traduites en japonais, tandis que celui-ci ne pouvait lire aucun mot de Yoshimoto par quelque langue occidentale. À la fin de l'entrevue Foucault souhaite bien que Yoshimoto soit traduit en français, si non en anglais. Encore dix ans passés, l'illusion commune commence à se traduire en français, mais cette traduction n'est maintenant qu'une offrande au tombeau du grand penseur.

# 泉鏡教授の探偵旅行

高浜 眞子著

## 泉鏡教授の探偵旅行

金沢 鎌倉 サン・ジェルマン・アン・レー

高浜 眞子



デジタルエースト株式会社

印刷本 定価 1,575円

- フォークロア学教授 泉 鏡 <sup>いずみかがみ</sup> が教え子の女子大生たちと研究旅行に行く先々で奇妙な事件に巻き込まれます。事件の舞台は金沢を中心に、鎌倉、サン・ジェルマン・アン・レー(フランス、パリ郊外)、他にわたります。
- 特に金沢の別荘を足場にして金沢の文化や歴史を研究していると、必ずと言っていいほど何らかの事件に巻き込まれる。事件簿というよりはリサーチ記録と言うべきか。北陸新幹線が開通した2015年3月以降、金沢に対する興味がさらに高まっています。泉鏡教授と一緒に様々な文化的背景の探求を進めていただければ幸いです。
- 著者について

著者高浜眞子は謎の人物で、どうやら鏡教授の関係者らしいところまでは分かっている。

### 目次

- 金沢味噌蔵町殺人事件
- 金沢主計町殺人事件
- 犀川殺人事件
- 兼六園徽軒(ことじ)灯籠殺人事件
- 金沢城石川門殺人事件
- 鎌倉街道殺人事件
- 鎌倉由比ヶ浜殺人事件
- 番町殺人事件
- サン・ジェルマン・アン・レー殺人事件
- 金沢卯辰山殺人事件
- 能登中島殺人事件



電子書店一覧

希望小売価格 500円

# 泉鏡教授の旅行事件簿

ミラノ、エズ、松江、三内丸山遺跡

## 泉鏡教授の 旅行事件簿

ミラノ エズ 松江 三内丸山遺跡



デジタルエッセイ株式会社

高浜 眞子著

- フォークロア学教授泉鏡が教え子の女子大生たちと研究旅行に行く先々で奇妙な事件に巻き込まれる。今回の事件の舞台は、ミラノ、エズ(フランス)、松江、三内丸山遺跡、他にわたる。文化や歴史を研究していると、必ずと言っていいほど何らかの事件に巻き込まれ、旅行記が事件簿になってしまう。

- 著者について

著者高浜眞子は謎の人物で、どうやら鏡教授の関係者らしいところまでは分かっている。

- 目次

- ミラノ殺人事件
- アッシジの謎
- エズ失踪事件
- 松江城殺人事件
- 弘前城殺人事件
- 三内丸山遺跡の怪
- 鬼押し殺人事件
- にしん御殿殺人事件
- 伊豆山殺人事件
- パース誘拐事件

印刷本 定価 1,575円



電子書店一覧

希望小売価格 500円

# 泉鏡教授のアメリカ旅行

ボストン ニューヨーク ニューオーリンズ ロサンゼルス サンタ・バーバラ

高浜 眞子著

## 泉鏡教授の アメリカ旅行

ボストン・ニューヨーク・ニューオーリンズ

高浜眞子



デジタルエステイト株式会社

名古屋にある女子大学でフォークロア学を研究している教授泉鏡が教え子の女子大生たちと研究旅行に行くが、その旅先で必ずと言っていいほど奇妙な事件に巻き込まれる。事件の舞台は今回はアメリカ。ボストン ニューヨーク ニューオーリンズ ロサンゼルス サンタ・バーバラ。さらに、バルセロナ、フィジーと舞台は広がる。研究のためのリサーチ記録が、心ならずもまたもや事件簿となってしまった。

著者について

著者高浜眞子は謎の人物で、どうやら鏡教授の関係者らしいところまでは分かっている。

目次

- ・ ボストン殺人事件
- ・ ニューヨーク殺人事件
- ・ ニューオーリンズ殺人事件
- ・ ロサンゼルス殺人未遂事件
- ・ サンタ・バーバラ・ビーチ事件
- ・ サンフランシスコ・ゴルフツアー事件
- ・ バルセロナ殺人事件
- ・ フィジー心中未遂事件

印刷本 近日発売


電子書店一覧

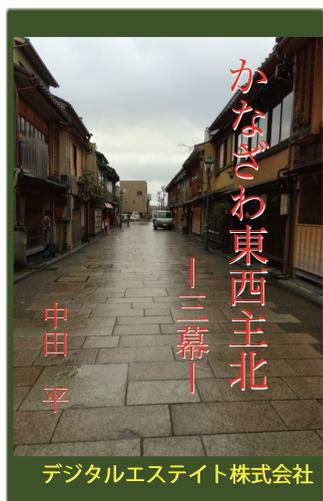
希望小売価格 500円

# かなざわ東西主北

中田 平著

『かなざわ東西主北』は第5回 泉鏡花記念金沢戯曲大賞に応募した戯曲。

室生<sup>さいこ</sup>犀子は金沢の西茶屋の水琴楼の娘で女優である。自分が見つけた新人女優の吉宮令佳と共に新作の『細川ガラシャ』の稽古に励んでいる。令佳は悩みごとがあるために演技に迷いがある。稽古を見ていた戯曲の原作者のフォークロア学教授の泉鏡は、演技術を伝授することで令佳の悩みを救おうとする。令佳の悩みの原因は引きこもりの弟のが新興宗教に入信したことであった。実は圭は新興宗教「心の友」から相次いで亡くなった両親の遺産「風茶楼」<sup>ふうちやろう</sup>の寄付を迫られているのであった。東京の検事職を辞めて最近金沢で弁護士を始めた徳田秋子は犀子と鏡の共通の友人である。鏡の親戚である多美が女将を務める主計町（かずえまち）の鍋の「太郎」で久しぶりに三人が再会した会食会で秋子が令佳の相談に乗ることが決まる。金沢を拠点に北陸方面に信者拡大を図る宗教法人「心の友」が、偶然にも水琴楼で慰労会を開くことになった。それを母の女将から聞いた犀子は、一計を案じて、秋子と令佳を芸妓に仕立てて客を迎えた。宴会客との話の中で西茶屋出身の夭折の天才小説家島田清次郎が水琴楼の女将の母と泉鏡の祖母菊乃の幼友達だったことがわかる。回想の中、自称天才の島清は同世代の芸者菊乃と水琴楼の先代の女将から散々にたしなめられる。宴会は女将の三味線で犀子、秋子、令佳の唄と踊りで華やかに盛り上がった。料理は楓茶楼の元板長の高橋が圭と鏡を従えて作った極上の加賀料理だった。もともと料理を作ることが好きだった圭はすっかり料理の魅力に目覚め、宗教団体から脱退して調理士を目指し、姉と共に楓茶楼の再建を決意する。圭が高橋の下で板前見習い、令佳が女将見習いと、水琴楼は楓茶楼の再建を目指す兄弟の修業の場となることになった。すっかり迷いが晴れた令佳を従え、犀子は見事に『細川ガラシャ』を演じきり、歌劇座の客から大喝采を浴びる。客の中には鏡、多美、秋子、圭、高橋がいたことは言うまでもない。



印刷本 定価 1,000円

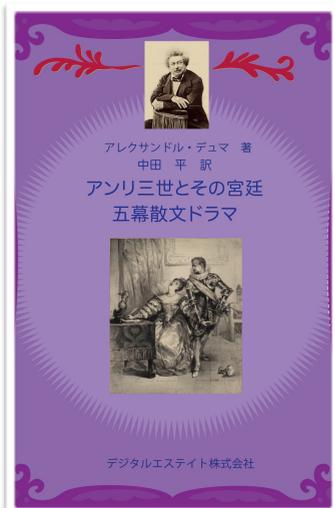

電子書店一覧

希望小売価格 500円

# アンリ三世とその宮廷

## 五幕散文ドラマ

アレクサンドル・デュマ著 中田平訳



印刷本 定価 1,500円

時は1578年7月20日のことである。フランス国王アンリ3世の母、フィレンツェから亡き国王アンリ2世に嫁いだカトリヌ・ド・メディシスと占星術師ルッジェリは、アンリ3世の寵臣サン＝メグランがギーズ公爵の夫人に恋い焦がれていることを利用して、サン＝メグランとギーズ公爵の両方から気弱な国王への影響力をそごうと画策する。カトリックとユグノーの殺し合いの宗教戦争の只中で、後にアンリ4世になるナヴァール王アンリを加えて3アンリの戦いと言われる時代である。ルッジェリは眠り薬で眠らせたギーズ公爵夫人とサン＝メグランを引きあわせて二人が両思いであることを悟らせる。

新教徒に対抗するカトリック同盟の盟主に自らなつて、次期国王の座も狙おうとするアンリ・ド・ギーズのカトリック同盟に盟主の任命という性急な要求に、プロワの三部会まで待てと諭すアンリ三世。事態は切迫していると反論するギーズ公。甲冑で登場したギーズ公が弾丸が飛んで来ても正面で受けてみせよう豪語するのを、サン＝メグランが吹き矢筒でボンポンを命中させる。怒りに燃える両者の間で決闘が決まる。

怒りに任せたギーズ公爵は鉄の籠手で青瘡ができるほど夫人の腕を締め上げ、無理強いにサン＝メグラン伯爵をギーズの館におびき出す偽手紙を口述させる。一方、宮廷ではカトリック同盟の盟主の任命決議に入り、「余の権威において余自身を盟主と宣言する」と自ら盟主になることを宣言したアンリ3世。ギーズ公爵はカトリヌ・ド・メディシスに何か訴えようとするが、アンリは早く署名せよとダメ押しをする。第1の企みは失敗に終わった、埋合せはつけてやる、憤怒のなかで署名するギーズ公の前で会議の閉会が告げられる。

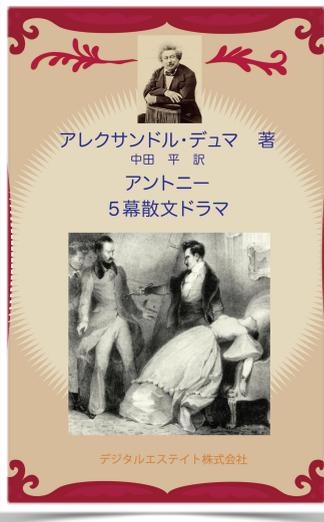
半信半疑でギーズ公爵夫人の元に忍んできたサン＝メグラン伯爵は来ないようにと祈る夫人の声を手がかりに部屋までたどり着く。危機一髪で部屋から逃げ出したサン＝メグランは待ち伏せした手のものに暗殺される。公爵が最後の台詞を吐く。「よし！さあ、家来の始末はつけた、今度は主人の番だ！

電子書店一覧

希望小売価格 500円

# アントニー

## 5幕散文ドラマ



印刷本 定価 1,500円



電子書店一覧

希望小売価格 500円

### アレクサンドル・デュマ著 中田平訳

アレクサンドル・デュマは1802年フランスのヴィレール・コトレ生まれ。19世紀フランスを代表する作家の一人。幼少よりラテン語、古典文学を学び、17歳で『ハムレット』見て劇作家を目指す。20歳でパリに出た後、『アンリ三世とその宮廷』、『クリスティーヌ』の大成功によって劇作家としての地位を得る。その後も数多くの劇作を発表し続けるが、フランス・ロマン派の影響を受け、徐々に歴史小説に移行する。1844年、「ル・シエークル」誌に連載された『三銃士』が爆発的な人気を得た他、『王妃の首飾り』、『黒いチューリップ』などの大作を世に送り出す一方で、革命に積極的に参加するなど当時のフランス国内に多くの影響を与えた。晩年はフランス、ベルギー、ドイツ、オーストリアなどを転々としながら創作活動を続け、1870年、ピュイの別荘にて死去。

主な作品は、『三銃士』、『二十年後』、『モンテ・クリスト伯』、『王妃マルゴ』、『王妃の首飾り』、『黒いチューリップ』など多数。

«Elle me résistait, je l'ai assassinée!...»

「俺を拒んだ、だから殺したのだ!」

有名なこの幕切れの台詞と共に、愛人アデルを殺した暗い目付きの主人公アントニーは、1831年以後しばらくの間フランスの若い世代を席卷した。1831年5月3日ポルト・サン・マルタン座で初演された『アントニー』は、当時の上演事情から見ると異例としか言いようのないほどの連続上演記録を作った。「このドラマはパリで連続131回上演された。内訳はポルト・サン・マルタン座で100回、オデオン座で30回、イタリアン座で1回である。そればかりか、またフランス中で巡回公演され、その年1831年は非難ごうごうであったが、1833年から1837年までは大成功を取めた。」

今日のわれわれから見るといささか大時代なこの姦通劇が、どのように着想され、どうしてこのような熱狂的な反響をもたらしたのであろうか。

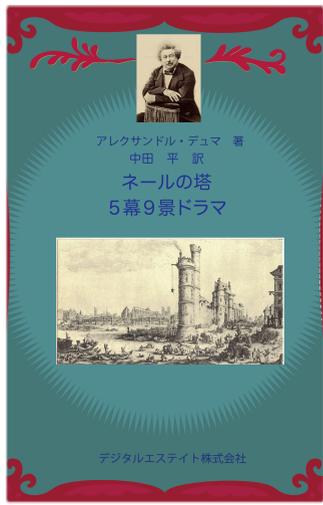
# ネールの塔

5幕9景ドラマ

アレクサンドル・デュマ著 中田平訳

ネールの塔にまつわる歴史は次のようなものでした。

中世の物語、特にネールの塔の伝説的な物語は当時流行であった。史実では、女王マルグリット・ド・ブルゴーニュ(1290-1315)と義妹のブランシュは、それぞれフィリップ・ドルネとゴートイエ・ドルネという兄弟を愛人にし、モービュイッソンの修道院で逢引きをしていた。1314年、四人は密告されてルイ強情王と呼ばれたLouis Xの命令で全員逮捕された。一人の若者は尋問によって自白(しかし、裁判の一切が秘密であったために、すべて憶測の域を出ない)し、拷問の果てに死んだ。1315年4月のことであった。1322年、女王は、伝説の語るところでは、1315年4月30日王の命令によりシャトー・ガイヤールで絞殺されて死んだ。ブランシュは1322年解き放たれ、僧籍に入り、モービュイッソンの修道院に赴いて翌年そこで死んだ。この姦通を手引きした端役たちは死刑か、または逃亡した。さらに二番目の義妹ジャンヌは一旦告発されたが、身の潔白を証明することに成功した。これがこの事件にたった2頁しか割いていない同時代人のド・ナソジの『年代記』の継承者が教えてくれるすべてである。ネールの塔がフィリップ美男王の嫁たちの放蕩三昧(ほうとうざんまい)の本山であり、一夜限りの愛人の死体を翌朝セーヌ川に投げ落とさせたという、これといった根拠もない一つの伝説が生まれたのはかなり古いことである。これらの情夫のうちビュリダンなる人物が問題である。事実、ビュリダンという人物はどこにも見当たらないうえに、さらにもっと可能性薄いのはパリ大学の総長であった哲学者ジャン・ビュリダン(1290-1358頃)がマルグリット・ド・ブルゴーニュの愛人であったということである。様々な伝説がジャンヌ・ド・ブルゴーニュあるいはマルグリット・ド・ブルゴーニュとの関係を彼に負わせ、その二人のどちらかが(ヴィヨンが書いているように)彼を袋に入れてセーヌ川に投げ入れ、そのために死んだかどうかは様々な異本がある。ブランドームはその『艶婦列伝』のなかで有罪の女王のことに触れることなく、ネールの塔における王家の血みどろの乱痴気騒ぎの伝統について言及している。



印刷本 定価 1,800円


電子書店一覧

希望小売価格 500円

# ミッドナイト短歌

揺らめく卵子

橘かほり 著



印刷本 定価 1,000円

名古屋市に生まれる。高校の頃、和歌の世界に目を開かれる。大学の国文科に学び『万葉集』の自然詠に関心を抱く。後、『古今和歌集』の時代の和歌へと関心が移行してゆく。ある時、短歌を詠み始めたが、数年で終わる。しかし、再び、昨年末から詠み始めたが、師もなく、グループにも属していない。

『ミッドナイト短歌—ゆらめく卵子—』は、大人向けの短歌と二編の随筆の本です。本の題名の短歌の前に「ミッドナイト」の言葉を付けたのは、名前の通り、真夜中に大人が日常をすっかり忘れ、夜の妄想の言葉の世界に一時遊んでいただけたらという思いを込めました。本の内容は第一章ミッドナイト短歌で、第一節「季」は自然の時の流れの中の風景をシュールに自分の目に写ったままに詠んでいます。第二節「雑」は「季」にも「恋」にも入らない短歌です。第三節「恋」の内容ですが、妄想の世界ですから、女性の立場だけでなく、男性の立場からも詠んでいます。そして、詠んで頂ければわかりますが、異性間恋愛だけでなく、妄想ですから、もっと広げて同性間恋愛も少数ですが、詠んでいます。このようなミッドナイト短歌はこれで終わり、第二章 随筆に続きますが、二編あります。以上の内容の本ですが、余裕のある大人が妄想の言葉の世界で気ままに自由に日常と又違った時間を楽しむことも人生を豊かにしてゆく一つとなるでしょう。狭い世界より広い世界、意識が広がっていった方がいつもの日常が生きやすいものとなるはずですが、それこそが大人の成熟した余裕はないのでしょうか。このミッドナイト短歌の世界の中で、時にはスリリングに、時には純粋に、時には狡猾に、時には妖艶に、時にはまだ見ぬ自分に出逢うというように、様々な感情を味わい尽くしてみるのも新鮮な驚きがあることではないでしょうか。真夜中のこの妄想の森への一人旅を終えて、目覚めた翌朝はきっとどこかが変わっているかもしれません。そんな今までにあまりない不思議な魅力的な旅をしてみませんか。今からご案内しましょう。さあ、どうぞ・・・。


電子書店一覧

希望小売価格 500円

# 百人一首 ラブ

橘かほり 著



印刷本 定価 1,000円

名古屋市に生まれる。高校の頃、和歌の世界に目を開かれる。大学の国文科に学び『万葉集』の自然詠に関心を抱く。後、『古今和歌集』の時代の和歌へと関心が移行してゆく。ある時、短歌を詠み始めたが、数年で終わる。しかし、再び、昨年末から詠み始めたが、師もなく、グループにも属していない。

「百人一首 ラブ」は「小倉百人一首」の和歌を本歌とした初の本歌取りの歌集です。「小倉百人一首」の時代より前、すでにあった本歌取りの修辞法で現代短歌を百首詠んだものです。また、本歌取りの歌とは「新古今和歌集」などによく使われていた和歌の修辞法の一つです。本歌取りは、古歌の特徴的な語句を使ったり、古典の一部、たとえば物語などを下敷きにしたり、また漢詩文の発想を踏まえる修辞法です。それを使うことで、古歌などの持っている世界の上にさらに新たな世界を展開させ、歌に重層的世界を生み出してゆくものです。「百人一首 ラブ」は、短歌の詠み方の一つと考えて頂ければ良いのです。和歌の修辞法は、古くは「万葉集」の時代からあり、現在見る形になってきました。この歴史の中で磨かれてきた修辞法を使わないのは、あまりにももったいなく、残念です。この修辞法を使うことで短歌の世界がさらに広がり、奥深さや面白さが増したらどんなにいいでしょう。この本を手にした方がこの昔からの修辞法の魅力を知って、さらに意識が広がったり、本歌取りの短歌を詠んでみようと思われたり、また、拙歌から「小倉百人一首」の本歌の何番かを当ててみるのも楽しい一つの読み方かと思います。



電子書店一覧

希望小売価格 500円

# 追悼吉本隆明 ミシェル・フーコーと「共同幻想論」

中田平著

この書「ミシェル・フーコーと『共同幻想論』」は以下の二つの対談と二編の独立した文章で構成されている。

- 一 対談「消費資本主義の終焉から贈与価値論へ」
- 二 鼎談「吉本隆明『共同幻想論』を語る」
- 三 『『共同幻想論』のフランス語訳の完成にいたるまで』
- 四 「ミシェル・フーコーと『共同幻想論』」

2つの対談はそれぞれ時期と対談者を異にしながら、吉本隆明が『共同幻想論』の現代的意味とミシェル・フーコーの仕事と人柄にかんして率直に語っている。「『共同幻想論』のフランス語訳の完成にいたるまで」は中田平が『共同幻想論』をフランス語に翻訳した経緯を、また『ミシェル・フーコーと『共同幻想論』』は『共同幻想論』をフーコーの仕事の全体と比較しようとした論文である。

この本は、日本を代表する思想家吉本隆明がフーコーとの対談を契機にフランス思想界に知られるに至った経緯と、彼の主著『共同幻想論』を世界思想にもたらすことを願ってフランス語に翻訳した私と妻・たか子の格闘の経過を世に問うものである。

吉本は『共同幻想論』の序文でこう書いている。「人間が共同のし組みやシステムをつくって、それが守られたり流布されたり、慣行となったりしているところでは、どこでも共同の幻想が存在している。そして国家成立の以前にあったさまざまな共同の幻想は、たくさんの宗教的な習俗や、倫理的な習俗として存在しながら、ひとつの中心に凝集していったにちがいない。この本でとり扱われたのはそういう主題であった。」未開社会のタブーや『古事記』のような神話や宗教的な習俗などは明らかにフーコーの言う「文化の無意識」の構造であり、その上で個々人が生活をしている。その逆に、諸個人の無意識のなかに、「歴史的な構造をもった文化」が根を下ろしているとも言える。吉本は「禁制（タブー）の解明を共同の幻想を解明する出発点とした。そのとき手がかりにするのはフロイトの『トーテムとタブー』の分析である。ほとんど同じ年に地球の反対側で書かれた『言葉と物』と『共同幻想論』とが、これほどまでに呼応しているとは驚くべきではなからうか。



印刷本 定価 2,160円



電子書店一覧

希望小売価格 500円

# サルトル・ボーヴォワール論

中田平著

- 1 ステファンヌ・マラルメの実存的精神分析——《マラルメ 1842-1898》註解——
- 2 サルトル思春期考
- 3 もうひとつの「負けるが勝ち」 ジャン・ロトルーの『聖ジュネ正伝』——その構造と意味——
- 4 メロドラマからサイコドラマへ——デュマの『キーン』とサルトルの『キーン』——
- 5 ボーヴォワールとその時代

「ステファンヌ・マラルメの実存的精神分析」は実存的精神分析の構造を非常にコンパクトに提示している。第2論文は「サルトル思春期考」と題して。サルトルの自伝的年代期のなかで、1917-1929年のサルトルの思考や文章を対象とした論文。第3論文は、サルトルの実存的精神分析の名著『聖ジュネ』の副題「殉教者にして反抗者」はたんにジャン・ジュネのことを比喩的に示しているのではなく、17世紀のバロック劇作者ジャン・ロトルーの『聖ジュネ正伝』の主人公ジュネを指しているのである。些細なようにみえる副題の選択にサルトルの文学的教養が潜んでいることをロトルーの戯曲分析を通して示したものである。第4論文は、サルトルの戯曲のもつイデオロギーの意味と、それが提起した広範な美学上の問題とを同時に論じるために、「演劇としてのサルトル演劇」に照明を当てて、サルトルの劇作術の一端を解明することをめざした。最後の第5論文は「ボーヴォワールとその時代」（1980年及び1981年）である。前の4つの論文と比べて2分冊分のこの論文はボリュームが大きい。名古屋の朝日文化センターに頼まれてボーヴォワール講座を担当したことをきっかけに、それまでまともに研究していなかったボーヴォワールに本格的に取り組んだ成果である。この論文は結果的にボーヴォワールの生涯を論じたものになった。このなかでは『第二の性』の成立事情と構造分析に関して、特にレヴィ＝ストロースとの関係を明らかにしている「間奏曲『第二の性』」は『第二の性』を読む時の参考になるのではないと思う。



印刷本 未発売


電子書店一覧

希望小売価格 500円

# 明治村幻想

中田平著

## 明治村幻想



印刷本 近日発売

明治村幻想は、タイトルどおり、博物館明治村を舞台に現代と明治時代のパラレルワールドが共存する不思議な空間で物語が進行する。明治村は普段は見学者が明治時代の代表的な建造物に触れて楽しむ建築物の博物館でしかない。ところで、建物にはそこに住んでいた人間の魂が宿するという。もしそうなら、明治村にある森鷗外・夏目漱石邸にはどこかに鷗外と漱石の魂が漂っていても不思議ではない。夏の別荘とともにラフカディオ・ハーンこと、小泉八雲がそこに住み着いているかもしれない。名古屋にある私立女子校の生徒綾乃が何らかの事件・事故に巻き込まれて明治村で失踪した。大学のレポートを書くために明治村見学に来た女子大生なるみが、夏目漱石の小説の主人公らしい猫に導かれて現代の明治村から明治時代の明治村というパラレルワールドにタイムスリップしてしまった。そこで出会ったのが博物館明治村を作った二人の人物であった。二人の人物は明治村に住み着いた歴史上の人物が現代にタイムスリップしないように監視を続けているのであった。二人は明治村の住人と現代人との間にトラブルが起こらないように、なるみに綾乃を元の世界に連れ戻してくれるように懇願する。綾乃が若い鷗外と深い関係に陥らないか心配しているのだ。奇妙なことに、漱石はなるみを綾乃に引き合わせる役割を引き受ける。

あらすじ：愛知県市にある明治村をご存知だろうか？明治村は、明治時代の貴重な建造物が失われていくことを嘆いた建築学者の悲願を、鉄道会社の社長が叶えた、建築物の博物館である。ところで、建物には住んだ人間の霊が宿るということを知ったことがないだろうか？人気(ひとけ)のない建物のなかに入って、ふとその建物になにかの気配を感じることはないだろうか？明治村に移築された建物に、かつてそこに住んでいた人々の魂も一緒に移り住んでいるとしたら明治村の見方がどう変わるだろうか？イヤイヤ、かく言う私は、実は、明治の文豪と呼ばれた夏目漱石の家に飼われていた猫なのだ。何の因果か、漱石邸と一緒にこの明治村に連れてこられてしまったのだ。移築騒ぎも収まり、明治村ようやく平和が戻ったと思ったら、平成の日本の一人の女の子が、突然、明治村のパラレルワールドに迷い込んだ。吾輩にとっては、誠に迷惑な話だ。その女の子は、果たして無事に平成の日本に戻れるのか？この物語はその顛末を残さずお伝えしようという話だ。

なるみと綾乃は無事、元の世界に戻れるのだろうか？

電子書店一覧

希望小売価格 500円

# パリ生活3週間

～モンパルナスにアパートマンを借りて～

中田平著



パリといえば、なんとといってもまだ日本では観光地として人気が高い。ファッションやブランドやフランス料理や世界遺産、なんでも揃っていて、その上、建物や街並みが魅力的である。ツアー旅行でヨーロッパといえば、まずパリは必ずと言っていいほど旅程に入っているのが当たり前になっている。

そんなパリだが、しばらく滞在してみると駆け足で街並みや歴史的記念物を見ているのとは違った表情を見せる。まず、聞き取れないフランス語やパリジャンやパリジェンヌたちの冷たいあしらいにがっかりさせられたり、国鉄職員やデパートの店員の横柄な態度に憤慨したり、すっかりフランス嫌いになる人も多い。また、スリやひったくりやジブシーの物乞いなどに怖気づく人も多い。

著者はかつてフランス語を教えていたが、定年退職になったので久しぶりにパリに3週間、妻とともにアパートマンを借りて生活してみようと思立った。この本は毎日の生活を暮らしてみた著者夫婦の日常体験を通して、これからパリに行こうと思う人や、しばらく滞在してみたいと考えている人の参考になればと思って書いたものである。

目次

3週間のパリ滞在旅行の計画と準備

航空券の予約

短期滞在型のアパート

1泊だけのホテルはHotel.comで予約

7月24日

成田空港発、パリ、シャルル・ド・ゴール空港着、空港からホテルへタクシーで移動

夜食を食べに夜の街で中華料理を楽しむ

メニューの読み方

(以下略)

印刷本カラー 定価2,000円


電子書店一覧

希望小売価格 500円

# 泉鏡教授の探偵旅行

きんなつめ

## 大阪城消えた金 棗

中田平著

泉鏡は愛知県名古屋市にあるK女子大でフォークロア学を教える57才の大学教授である。

泉鏡は専門とする学問の性質上、世界中を旅行して民俗や文化の研究に従事している。外国での滞在が数週間から数ヶ月に及ぶこともあるが、そのためか、または彼が発するオーラのせいなのか、彼の研究旅行には必ずとっていいほど何かしらの事件が起こる。大阪城のそばでホームレスが名古屋の女性に金の棗を売った。その夫がパリのヴァンドーム広場の宝石店で三千万円で売ったことがテレビで報道される。泉はヴェルサイユで学会発表旅行に学生を連れてでかけた。卒業生たちもそれを聞きつけてパリで合流する。旅行のついでに棗を買った宝石店に行くと、すでにその棗を大阪城の学芸員が買い戻していた。パリのホテルでポルトガル人窃盗団がその棗を盗んだが、仲間割れが原因で殺人事件に発展し、棗は無事学芸員の手に戻った。

日本に帰って大阪城に行ってみると、学芸員が、棗で三千万円を手に入れた主婦が三千万円を返してくれるという。泉が頼んだからである。発掘現場に行ってみると、問題のホームレスが発掘調査をしていた。泉の推理ではホームレスは学会で学説上の対立で爪弾きになった学者の羽柴秀人で、自説を証明するために金の棗を売ったとマスコミにタレこんだのだ。直接ホームレスに確かめると、まさしくその羽柴秀人であった。

発掘現場から網島に出てみると憔悴きった女性がいた。蒸発した夫を探して毎日のように手がかりを求めてさまよっているという。羽柴夫人であった。自説が証明されて恨みが晴れた羽柴は夫人の元へ帰る日が来た。こうして泉鏡教授の旅行事件簿に新たなページが増えたのであった。



印刷本カラー 定価1,000円



電子書店一覧

希望小売価格 500円

# 準備中（近刊）

1. *Michel Foucault et « L'illusion commune »* par Hitoshi Nakata  
（『ミシェル・フーコーと共同幻想論』フランス語版）
2. 『よみがえる時』（映画シナリオ）高浜眞子著
3. 『大阪城淀及治長恋後日譚遺恨姫櫓』（歌舞伎台本）中田平著
4. 『越中人』（狂言台本）高浜眞子著

その他、これからも次々と出版を準備しています。ご期待ください。

発行者 デジタルエステイト株式会社

Digitaestate Inc.

〒446-0001 愛知県安城市里町1丁目

15番地8